

CLCからしだね書店便り



8

August
2024
no.44



* 今月のご案内 *

- ① 連載第 8 回
「子どもと大人のためのこころの対話—
信仰と哲学」
- ② 読書感想本『なぜ「救い」を求めるのか』
- ③ キリスト教書店大賞 2024

CLCからしだね書店では…

- ① キリスト教書だけでなく、福祉、心理、精神、哲学、児童書、その他一般の良書もそろえています。
- ② お洒落でかわいい雑貨や小物もあります。
- ③ ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチも提供しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
- ④ コーヒーを飲みに来てくださるだけでもけっこうです。
- ⑤ 図書コーナーも併設予定です。ドリンクを片手に、好きな本を手にとってお読みください。
- ⑥ 古書のコーナーもあります。ほりだしものあります。
- ⑦ 読書会や著者を招いての講演会など、人と人が出会い、つながる「対話」の場を提供します。

CLCからしだね書店 & *トラファルガー*
営業時間 11:00-17:00
日曜日と年末年始 (※祝日も営業)
定休日 毎月第3木曜日は書店のみ営業

子どもと大人のための対話

信仰と哲学
坂岡大路

前回までのあらすじ

ここは哲学的な議論を楽しむ風変わりなカフェ、「べれや」。主語を隠して「真理」を語る論法に要注意、と語るマスター。それに対し、「真理を重んじなければ集団がまとまりを失ってしまうのでは？」と懸念するタネオくん。



マスター：タネオくんが必要だと思っている「集団のまとまり」ってなんだろう？

タネオくん：え？秩序を守って、混乱が起こらない……ってことですかね。

マスター：確かに。それは宗教が果たしてきた大切な役割だ。宗教社会学者のデュルケムは、「宗教とは人々を道徳的共同体に結合させる信念と行事である」と言っている(『宗教生活の原初形態』。「真理」は人々を結束させ、混乱を治め、集団に秩序とまとまりを与える。そのような機能を持っている。一種の権力と言ってもいい)。

タネオくん：それはそれで否定されるべきことではないですよね？

マスター：もちろんその通りで、権力は共同生活を営むにあたって必要なものだ。しかし、イエスの振る舞いは「集団の秩序」を頑なに守るものだった……と必ずしも言いきれぬかな？



タネオくん：それは……むしろ真逆の行動を取っていたことも多いですね。

からしきん：だから十字架につけられたんですよ。神殿で大暴れして権力者から目をつけられたり。でもなんのためにそんなことをしたんだろう？

マスター：それを理解するためには、当時の時代背景を知っておく必要がある。イスラエルの上流階級であるサドカイ人は、エルサレム神殿という巨大な宗教的権威をバックに神殿税などの重税を取り立てていたんだ。「特定の通貨でなければ納入を認めない」と言って不当に高い歩合で両替させたり、神殿認定の捧げ物を法外な値段で巡礼者に売りつけたり……さまざまな理由をこじつけてお金をしまり取っていた(荒井献『イエスとその時代』参照)。

からしきん：まるで靈感商法みたい！「この壺を買わないと不幸が訪れる」みたいな。

タネオくん：つまりイエスは宗教的権威を搾取の手段として利用する体制に対して憤っていたということですね？

マスター：律法主義者もサドカイ人も、律法や神殿といった神の権威に「真理」を後ろ盾にして民衆を「まとめていた」し、ある種の「秩序」を築いていた、と言えるだろう。

タネオくん：うーん、「秩序を保てればそれでいい」ということにはならないわけですね。

マスター：その通り。「そもそも何のための秩序なのか？」という本質を見失っては本末転倒だ。

からしきん：「律法の本質を見失った時、信仰は形骸化して律法主義になる」という、あの話ですね。

マスター：それでは、イエスは「どんな」秩序を目指していたのだろう？タネオくんどう思う？

タネオくん：イエスの公生涯の第一声は、「神の国は近づいた」でしたよね。「神の国」つまり、神の愛が別け隔てなく、すべての人に行き届く世界の到来を告げた。

からしきん：でも「愛」なんて言われると、ちょっとこそばゆい感じもするんだよね(笑)

マスター：確かに。日本語の「愛」は「愛執」とか、よくない意味でも使われるからね。少し解説すると、聖書の「愛」が意味するところは、日本語の「愛」のニュアンスとはか



タネオくん：もともと「大切」と訳されていたんですって？(連載第二回参照)

からしきん：「他者を自分自身と同じように大切にする」「他者の隣人になる」ことですね。

マスター：神はすべての人の存在を尊く、大切に思っている。その「一人ひとりを大切に思う心」(アガペー)が分け隔てなく、普遍的に行き届く世界。それが、イエスの見た「神の国」のビジョンだったんだろうね。

タネオくん：「真理」と言えば、「真理はあなたがたを自由にする」なんて言葉も、イエスは残していますね(ヨハネの福音書8章32節)。

マスター：裏を返せば、弱い立場の人に不自由を押し付けて成り立つような「真理」は、真理の名に値しないと見える。

タネオくん：うーん、「自由」か……。なんだかよくわからなくなってきました。「一人ひとりの存在を大切にする」って結局どういことなんでしょ？って感じの風に関われば、そう言ったと言えるんでしょうか？



(へっへっ)

今回のポイントをまとめましょう。

- ①「真理」は権力的な機能を持つ。人々を結束させ、混乱を鎮め、集団に秩序とまとまりを与える。
- ②秩序を守ればそれでいい、ということにはならない。「そもそも何のための秩序？」という本質が見失われたとき、秩序は暴力的支配の温床になる。
- ③イエスがその到来を告知した「秩序」は、「神の愛が分け隔てなく、すべての人々に行き届く世界」＝「神の国」。その本質に逆行する（形骸化した）「秩序」に対して、イエスはむしろ批判的に振る舞った。

聖書が唱えている「人間一人ひとりの等しい大切さ」について、本編とは少し違う角度から考えてみましょう。旧約聖書によれば、人間は「神に似せて造られた尊い存在である」とされています。この人間観は歴史上、王政に苦しむ人々や、自由を求めて闘う人々



さかおか おおじ

1988年京都市生まれ。北海道大学大学院教育学院臨床心理学講座修士課程修了。札幌市内の児童精神科で臨床心理士として勤務。本質学研究会、哲子・フラクティニス学会、宗教倫理学会、キリスト教教育学会等の学術誌に論文掲載。札幌市若者支援施設Youth+（ユースプラス）でワカモノ哲学カフェを主宰するなど、オンラインや地域で子ども・若者と共に哲学対話を行う活動に取り組む。

を勇気づける大きな原動力となってきました。

たとえば、教会権力によって重税を取り立てられていた中世の町民・農民たち。彼らは、自由と自治を求めて決起したのですが、その根拠に聖書の言葉をくりかえし引用していました（田川建三『キリスト教思想への招待』参照）。また、近隣の大国から侵略され続けてきたポーランドの人々は、「神の似姿として創造された人間の尊厳」を根拠に、独立運動や民主化運動を闘ってきました（『ポーランドの歴史を知るための55章』参照）。第二次大戦後、ソ連からの独立と民主化を勝ち取れた背景には、キリスト教（カトリック）の強力な支えがあったのです（カサノヴァ『近代世界の公共宗教』参照）。

このように、当時の人々が置かれていた地域的・歴史的文脈の中で、聖書は解釈されてきました。その解釈が神学的に正しいのかどうか、私にはわかりません。しかし、上に紹介した名もなき民衆たちの生き様は、「自由と尊厳を求める闘い」という一点において、イエスの生涯とどこか重なって見えてこないでしょうか。

「救われたいこと」の意味

『なぜ「救い」を求めるのか』

（島蘭進、NHK出版、1700円＋税）



「救い」とか「救済」という言葉を聞いて、皆さんはどんなイメージを持たれるでしょうか？私はこの言葉を聞くと、オウム真理教の元幹部で2018年に死刑が執行された井上嘉浩氏が中学生の時に書いた、以下のような詩の一節を思い浮かべます。

朝夕のラッシュアワー／時につながれた中年達／夢を失い、ちつぽけな金にしがみつ／ぶらさがっているだけの大人達／工場の排水が川を汚していくように／金が人の心を汚し、大衆どもをクレイジーにさす／時間においかけてられて歩き回る一日がおわると／すぐつぎの朝、日の出とともに、逃げ出せない人の渦がやってくる／救われないぜ、これがおれたちの明日ならば／逃げ出したいぜ、金と欲だけがある、このきたない人波の群れから、
／夜行列車にのって…

井上氏は当時、尾崎豊を好んで聞いていたそうです。その尾崎を真似たようなこの詩に表された感慨は、青年期の悩みとしてはありふれたものでしょう。しかし、「救われたいぜ」と呟いた15歳の少年が、「救い」を求めた末に複数の犯罪にかかわり死刑に処せられたという事実を考え合わせてこの詩を読むと、本

当にやる瀬ない気持ちになりま
す。人間にとって「救い」とは一
体何なのでしょう？

宗教学においては、「救い」を重視する宗教を「救済宗教」と呼びます。キリスト教、仏教、イスラームなど、主要な宗教はこのカテゴリーに入ります。島蘭進「なぜ「救い」を求めるのか」は、現代を生きる人々は伝統的な救済宗教に距離を感じているという前提のもと、それにも関わらずなぜ「救い」がこれほどまでに人間にとって重要であり続けているのか、そして現代を生きる私たちと「救い」や「救済宗教」はどのような関係にあるのか、という課題を探求しています。

当たり前ですが、人間にとって「救い」が重要となるのは、「救われない状態」が意識される時です。それは典型的には死・悪・貧・病・争といった言葉で表される出来事を契機として自覚されます。救済宗教が説くのは、こうした誰もが直面する普遍的な苦しみから人間を救い出す道です。例えば仏教の開祖であるゴータマ・ブツダは、生きることは苦であるという洞察から出発しました。仏教において「苦」と訳されるのは、パーリ



語やサンスクリット語の「ドゥツカ」という言葉で、これには通常の苦しみという意味に加えて、「不完全さ、無常、空しさ、実質のなさ」といった意味が含まれるそうです。これは、人間の持つ「限界」あるいは「有限性」と言い換えることができるともいえます。「救い」とは、死を筆頭とする人間の限界や有限性と表裏の関係にあるものなのです。

本書によると、現代日本において、こうした救いへの希求は、既存の制度化された宗教の枠組みには収まらないような現象として現れています。「霊性」とか「スピリチュアリティ」などと呼ばれる動きがそれです。これは、特定の宗教団体に所属していているわけではないけれど、目に見えないものの領域や精神的・霊的なものを認める考え方を持つ人びとの宗教意識のことです。こうした人びとは、集団的に共有される信仰ではなく、個人がそれぞれにとって納得のいく宗教観・世界観を持っています。

「スピリチュアル」とか「スピリチュアリティ」という言葉を聞くと、「癒し」「パワースポット」「天然石」などを連想し、ちよつと胡散臭く感じる人も多いかも知れません。しかし、これらの個人的な自己変容や自己実現を目指す明るいスピリチュアリティがある一方で、「むしろ深い悲しみや心の痛み、解決が困難な苦難に焦点を合わせるもので、死に向き合うこと、大切なものの喪失や死別の経験に向き合うことを基軸とするスピリチュアリティ」（本書184頁）が広がっていると言います。こうした

つらい経験に向き合うための言葉と術を、宗教者としての経験を踏まえて提供し、そのプロセスに寄り添うことにとどまらず、

こうした「限界意識のスピリチュアリティ」には、従来の救済宗教と同じく、苦難とともに救いへの希求が見られます。しかしそこではある特定の救いの構造を信じるかどうかという明確な線引きはされず、したがって、信じるることによって「救われていない状態」から「救われた状態」へと移行するという段階のようなものも強く意識されていません。また、「救われている自分たち」と「救われていない他の人」という排他性もありません。むしろ、価値観や信仰にかかわらずすべての人が抱える苦難や限界意識を結節点として、他者とながらることを指向します。つまり「救われていない状態」（＝無力）を受け入れて、ただ一つの超越的な答えを出さず、そのことによつて「絶対」や「確かさ」という、他者との間に壁を作るものを自ら手放すことを選びます。このような「限界意識のスピリチュアリティ」は、従来の救済宗教が陥りがちであった独善や偏狭を克服し、異なった価値観や信仰を持つ者同士が排除し合うことなく、互いに支え合うような人間関係のモデルとなる可能性があるように思います。

もし井上嘉浩氏が、オウム教の教えの中に、性急に自己の「救い」を見出さず、「救われない自分」という限界にとどまっていたら、自分の弱さと限界に居場所を与えられていたら、他者との間に壁を作る「解脱」ではなく、「痛み」や「悲しみ」を大切にす

たタイプのスピリチュアリティを、著者は「限界意識のスピリチュアリティ」と名づけます。

このようなスピリチュアリティの例として、著者はアルコールス・アノニマス（AA）を挙げています。アルコール依存症の自助グループであるAAは、「12のステップ」と呼ばれる独自のプログラムを持っています。その第一の特徴が、まず自分たちがアルコールに対して無力であるという「限界の自覚」を強く持つことなのです。そのうえで、自分たちの欠点や限界を、自分を越えた力を取り除いてくれることを信じることで、これが第二の特徴です。このように、アルコール依存症の自助グループでありながら、そのプログラムは宗教的な救済の構図に類似しています。他方で、自分を越える力の存在を想定しつつ、その存在を強く主張することはありません。むしろ活動の中心はメンバー同士の経験を分かち合い、弱さを認めて支え合うことです。そしてそれを通して自分の限界に向き合う姿勢や方法をメンバーに提供することが目的なのです。

また、東日本大震災後に構想された「臨床宗教師」の活動も、例として挙げられています。「臨床宗教師」は、被災地や医療機関、福祉施設などの公共空間で、苦難や悲嘆を抱える人々に対して心のケアを提供する宗教者の資格として創設されました。「臨床宗教師」の仕事は、ケアを受ける人々に対して、特定の宗教の救いの構図を受け入れさせることではありません。そうではなく、その人の価値観や信仰を尊重しつつ、死別や喪失といった

ることで他者に開かれていくことの意味を伝えてくれる誰かに、もつと早く出会っていたら。獄中で井上氏が書いた以下の詩を読むと、そう思わずにはいられません。

日は巡る、苦と悲しみ、共に持ちながら

日は過ぎて行く、苦しみも悲しみも共に去りながら
人は生まれ死んで行く

その輝きはいつどこでもすばらしき存在の慈悲
生きることの原罪は限りなく深く

私はその大いなる苦悩にもみくちやにされている

でもそれが本当のやさしさなんです

私はそれを味わって、心を成熟へと誘います

それが罪人たる存在への償いだから

【書店員G】

注

- 1 門田隆将『オウム死刑囚魂の遍歴―井上嘉浩すべての罪はわが身にあり』（PHP研究所）、50・51頁。
- 2 ワルボララーフラ「ブツダが説いたこと」（岩波文庫）、58頁。
- 3 依存症治療の専門家である松本俊彦氏は、依存症を「痛みを抱えた人の孤立の病」と捉えたうえで、その回復のために絶対に必要な条件は、「世界中で一箇所だけいいから、安心して「クスリを使いたい」「クスリを使ってしまった」「クスリをやめられない」といえる場所、正直にそうしても誰も悲しげな顔をしない場所、誰も不機嫌にならない場所、決して自分に不利益が生じない安全な場所を持つこと」（『薬物依存症』15頁）だとしています。そうだとすると、依存症の自助グループは、「限界意識」を共有することで痛みと孤立から回復する場所と捉えることができるかもしれませぬ。
- 4 門田 同書270頁。

証し

日本のキリスト者
最相葉月 著 定価3,498円

大賞

日本のキリスト者
最相葉月

梅莊キリスト教書店
高橋友彦さん
少数派である日本のキリスト者。多くの教会者と信徒の方々の体験を基にした「証し」が決して一様でないことを考えさせられる。自分自身の信仰について振り返る時に良い示唆を与えてくれる本。

受賞のことは
著者 最相葉月

投票して下さった書店員の皆様、ありがとうございました。6年間の取材でお預かりしたキリスト者の言葉一つひとつを改めて思い起こし、皆様のご推薦を力にさらなる未来にお届けできることを心から感謝申し上げます。

撮影：平瀬拓

保育者の祈り

こどものために、こどもとともに

第2位

望月麻生 監修・著
小林路津子／新井純 著
定価1,320円

オヌヌ!

CLCからしだね書店
坂岡眞歌さん
こどもの心に寄り添い、隠れた思いを無強せず、丁寧に拾い上げて、より良いものへと導こうとする、保育者の祈りの言葉が書かれています。

日本キリスト教団出版局

非暴力の教育

今こそ、キリスト教教育を!

第3位

小見のぞみ 著
定価1,760円

オヌヌ!

京都ヨルダン社
田代伸一さん
教える者と教えられる者が認め合い、学び合い、感謝し合う、そこに教育がある。

日本キリスト教団出版局

非暴力の教育

非暴力の教育
今こそ、キリスト教教育を!

中尾のぞみ

日本キリスト教団出版局

全国のキリスト教書店員が選んだいちばん読んでほしい本

キリスト教書店大賞2024



2023年1月～12月に出版されたキリスト教書の中から
全国のキリスト教書店員の投票により大賞が決定!

大賞決定

主催 キリスト教出版販売協会
価格は10%税別

「キリスト教書店大賞 2024」の大賞が決定しました。ノミネートされた10作品の中から大賞に選ばれたのが、一般の出版社 KADOKAWA から出た、キリスト教徒ではないノンフィクションライターの、キリスト教徒へのインタビューで構成された本だったこと、しかもそのタイトルが、一般社会では知られていないキリスト教用語「証し」だったことは、なかなか興味深いものがあります。

CLCからしだね書店の書店員が投票したのは、2位『**保育者の祈り**』と3位『**非暴力の教育**』だったので、それなりにガッツポーズをしてしまいました。『**証し**』ほどの派手さはないものの、キリスト教徒の著者が、他者としていねいに関わっていくこうとする真摯で優しい姿勢に基づいて書かれた2冊の本です。

20年後、30年後の教会は、存続の危機を迎えていると言います。そんななかで、私たちはキリスト教徒として私達の生活や仕事、生き方を通して「証し」していかなければならぬと思います。それは、私達一人ひとりが暮らしの中で、社会に小さな「良い実」を残していくという「証し」だと思えます。私の言葉、行動、選択が、「良い実」を結びにふさわしいものであるか? というよりも、悩み迷ったあげくに間違いないをおかした私であっても、その「動機」がキリストの愛の恵みをたっぷり吸ったものだったか? 「失敗しました。ごめんなさい」の言い方、態度が、隣人に対して「良い実」として残ったか? が、「証し」なのだという気がします。

さて、ノミネートされなかったけれど、CLC からしだね書店推しの本は、『**苦しむ人・悲しむ人の支えとなるために**』に『**ニースピリチュアルケアの現場から**』窪寺俊之 島田裕子 赤羽正清 岸本光子 清田直人 上田直宏 共著 (いのちのこ とば社 1500円+税) です。また、次回、この本について、ご紹介できたらと思います。

読し
日本のキリスト者
最相葉月 著

オススメ!
横浜キリスト教書店
高橋友彦さん
少数派である日本のキリスト者。多くの牧会者と信徒の方々の体験を基にした「読し」が決して一様でないことを考えさせられる。自分自身の信仰について振り返る時に良い示唆を与えてくれる本。

定価3,498円
KADOKAWA

疑いながら信じてる50
新型キリスト教入門 その1
富田正樹 著

オススメ!
リバーサイドブックス
川端洋一さん
入門者におすすめ。加えて信仰歴の長い方にもおすすめています。

定価1,540円
ヨニル

交差するバプスタ
新たな運命のために
在韩国YMCA 編

オススメ!
名古屋文化会
伊奈均志さん
今こそバプスタナ問題を再考すべき。

定価2,640円
新教出版社

保育者の折り
こどものために、こどもとともに
望月麻生 監修・著 小林路津子/新井 純 著

オススメ!
CICからしだね書店
坂岡凱歌さん
こどもの心に寄り添い、抱かれた思いを無視せず丁寧に扱い上げて、より良いものへと導こうとする。保育者の折りの書籍が書かれています。

定価1,320円
日本キリスト教団出版局

全国のキリスト教書店員が選んだ
いちばん読んでほしい本

キリスト教書店大賞 2024

主催 キリスト教出版流通協会
2023年1月～12月に出版されたキリスト教書店の中から全国のキリスト教書店員が大賞を選出します。

ノミネート 10作品
(タイトル50音順)
価格は10%税込

あなたはあなたのままでいい!
とっておきの聖書のことば23
片柳弘史 著 RIE 絵

オススメ!
教文館キリスト教書店
石中頼子さん
聖書の一節と片柳神父さまの語、RIEさんのイラストが美しく、そばに置いて読みたいくなります。

定価1,595円
PHP研究所

カール・バルト
《教会教義学》の世界
寺岡聖基 著

オススメ!
キリスト教書店ハルルナ
嶋津秀成さん
膨大なバルトの著書を一覧できる入門書。

定価3,080円
新教出版社

これから生きるあなたへ
聖書の知恵 箴言31日
小林よう子 著

オススメ!
富岡館書店
大森紀代美さん
厳格な家父長制の時代に父から子へ語られた素晴らしい言葉の真髄を、今を生きる人達にもぜひ伝えたい。言葉の持つ可能性を信じ、なおかつ、神さまのあたたかいまなざしをまっちりと聴けた1冊です。

定価1,320円
日本キリスト教団出版局

夕暮れに、なお光あり。
老いの日々を生きるあなたへ
小島誠志/川崎正明/上林肇一郎/船子/渡辺正男 著

オススメ!
松山キリスト教書店
平岡光司さん
熱練の牧師5人の共著で、大変読みやすい。エッセイも交えた著書で、いく人か多く、年配の方々にもお勧めします。

6月
書籍出来
価格未定

定価1,650円
キリスト新聞社

非暴力の教育
今こそ、キリスト教教育を!
小児のぞみ 著

オススメ!
京都ヨルダン社
田代伸一さん
教える者と教えられる者が認め合い、学び合い、感謝し合う、そこに教育がある。

定価1,760円
日本キリスト教団出版局

わたしが「カルト」に?
ゆがんだ支配はすぐそばに
齋藤 寛/竹迫之 著 川島堅二 監修

オススメ!
エッセイの木
永野香織さん
旧統一教会が話題になり気になっていた時にびつたりでした。体験談など読みやすかったです。しかし内容が面白いわけではない1冊になっています。

定価1,650円
日本キリスト教団出版局

古書献本のお願い

たいへん申し訳ございませんが、送料をご負担いただけるとありがたいです。
(受付できないものもありますので事前にお知らせください。ご事情により
当店より回収に行かせていただくこともあります。ご相談ください)

【献本をお願いしたい本の種類】

- 1 キリスト教書、キリスト教に関連した本 (多少、書き込み等があっても、大丈夫です)
- 2 哲学、心理学等、人の生き方に関する本
- 3 社会の中で起きている問題を扱った本
- 4 暮らし (料理、健康、経済等) にかかわる本
- 5 小説 (人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません)
- 6 漫画 (人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません)

百科事典・辞書・開封済みの
CD・DVD・月刊誌・週刊誌等は
受け付けておりません

【本の送り先】

住所：〒607-8216 京都市山科区勤修寺東出町75 からしだね館
宛先：CLC からしだね書店 献本係 電話：075-574-1001 FAX：075-574-0025
Mail：clc @ karashidane.or.jp

【本と一緒に以下の内容を記入したメモをお願いします】

①献本者のお名前②ご住所③お電話番号④メールアドレス⑤さしつかえなければ、献本者の簡単なプロフィールをお願いします。

【献本感謝】

樋口昌子様 浜口雄二様 (順不同)

7月の古書の収益は50,471円でした。

【古本の売上を含むCLCからしだね書店の収益は、書店で働く障がい者の工賃になります】

献本くださった方のお名前を書店だよりにご紹介させていただきたいと思います。匿名ご希望の方は、お知らせください。ご寄贈いただいた皆様、ありがとうございました。

編集後記

◆ミッションからしだねでは、7月末にコロナ感染者が続出しました。夏風邪、熱中症、インフルエンザ、夏バテ…、体調を崩しやすい毎日、皆様いかがお過ごしでしょうか。◆振り返って、中学時代の夏休みの部活の思い出は、炎天下でのボール拾い、ランニング、素振り、そして、水分補給禁止の謎ルール。誰も死ななかったのは、今ほど気温が高くなかったからかもしれません。今や、空調の効いた自動車での定期刊行物の配達にも、水分補給は欠かせません。◆マスクも換気もこの暑さではなかなかつかいものがあります。皆様、くれぐれもご自愛ください。【店長】

お知らせ

理事長の論文が学会誌に掲載されました。
人間が担う苦しみの意味、人の尊厳と支援の本質について等、
実践をふまえた、スピリチュアルケアの視点からの考察です。
ぜひ一読ください。ご希望の方に無料でお送りします。
(残部が切れたらご容赦ください。)

『精神障害者福祉と責任 / 応答性(responsibility)の人間論
—キリスト教スピリチュアルケアの視点から学びつ—』
(坂岡隆司、日本キリスト教社会福祉学会
『キリスト教社会福祉学研究』56号・2024. Jan)

お名前とご住所、連絡先を記して、メール
又はファックスでCLCからしだね書店迄。
学会誌の抜刷をお送りします。

メール clc@karashidane.or.jp
FAX 075-574-0025

編集・発行：社会福祉法人ミッションからしだね
就労継続支援B型事業所からしだねワークス
からしだね書店&カフェ・トライアングル

〒607-8216 京都市山科区勤修寺東出町75 からしだね館
書店電話番号 075-574-1001 FAX 075-574-0025
書店メール clc@karashidane.or.jp



CLCからしだね書店便りの
バックナンバーはこちらから